

「舜子変」の民間文芸に於ける 伝承について

大 西 由美子

はじめに

「舜子変」は敦煌莫高窟から二十世紀初めに発見された帝舜に関する変文で、後部のないS.4654と、前部が欠損し唐の天福十五年の奥書きを有するP.2721vを合わせて、先行研究では「舜子変」として扱ってきた。しかし、この二鈔本は筆跡が異なり、舜の父の名も「苦瘦（嗽）」と「瞽叟」と異なるなど異同が見られ、同一の鈔本とみなすことはできない。またこの二鈔本は、接続部に当たる内容が重複していないため、二鈔本の間となる内容が一部不明となっている。

この二鈔本を合わせた「舜子変」は、『史記』五帝本紀や『古列女傳』母儀傳有虞二妃等に著される舜説話とは異なる内容を有しており、内容の近い文献としては、『千字文』李暹注、敦煌文書の「孝子傳」や日本に残る『陽明本孝子傳』、『船橋本孝子傳』等が挙げられる。このような孝子譚を基に、語り物としての「舜子変」が作られたと考えられるが、「舜子変」に見られる桃の樹の話や歴山で猪や鳥が舜の耕作を助ける話はこれらの文献には見られず、「舜子変」独自の内容となっている。

後世においては、『孝行録』（高麗 李齊賢）、『全相二十四孝詩選』（元 郭居敬）及び『日記故事』（明 張瑞圖校）が孝子譚の筆頭に舜の話を置き、舜が歴山で象と鳥に助けられて耕作する場面を話の主眼としている。助ける動物が猪から象に変化してはいる¹⁾ものの、そこには天が至孝の舜に感応し動物に援助させるという、「舜子変」のみが有する要素を見いだすことができる。その他の

文献には「舜子変」の形跡を見ることはできないが、近年、金文京氏をはじめ、陳永超氏の研究により、福建、広西などに残る民間文芸の中に「舜子変」との関連を認められるものが複数有ることがわかってきた。

本稿では、そのうち閩南の説唱「大舜耕田歌」「大舜坐天歌」を中心に「舜子変」との関連を検討し、更にその他の唱本類との比較から、S.4654とP.2721vの間で欠損している部分についても考察を加えたい。尚、本稿ではS.4654とP.2721vを「舜子変」の底本とし、誤字や仮借字は（ ）で示した。「大舜耕田歌」「大舜坐天歌」については、『俗文学叢刊』362 説唱閩南歌仔（中央研究院歴史語言研究所俗文學叢刊編輯小組 新文豊出版 2004年10月）に拠った。

1. 「舜子変」について

まず「舜子変」の鈔本に於いて、先行研究で底本とされている二鈔本のうちS.4654は、『舜子變一卷』の主題を有し「…舜子即忙下樹」で書き止まり、題を含めて23行の短い鈔本である。もう一つのP.2721vは前部が欠損しており「…房中臥地不起」から判読でき、『舜子至孝變文一卷』の尾題まで113行、その後奥書きが9行、最後に付記7行を有する鈔本である。

その内容について、7つの場面に分けて以下に簡単に説明する。

- ① 母の樂登夫人が亡くなり、父の苦瘦（嗽）は後妻を娶る。父が商いの長旅から帰ることを知った継母は舜に桃を取るよう樹に登らせ、自分で自分の脚を簪で刺し大声で叫ぶ。驚いた舜が樹から降りてくる。（ここまでS.4654後欠）／

（ここからP.2721v 前欠）帰宅した父の瞽叟は、「舜が桃の樹の下にたくさんの悪い棘を埋めたため両脚にけがを負いました。…私の黒髪と色白の面立ちを見て畜生の心を起こしたのです。」という継母の讒言に怒り舜を折檻する。しかし帝釈に助けられ舜は痛みを感じずにすむ。

- ② 継母が殺害を企み、舜に倉の修繕をするよう命じて上らせ、継母・父・義弟の象が三方から火をつける。舜は二つの笠を広げて飛び降り、地神が舜を救う。

- ③ 継母がまた殺害を企み、舜は井戸浚いをさせられる。黄龍が舜に銀錢を与え、それを井戸から引き揚げた父と継母は大喜びする。しかし錢が無くなると父が石で井戸を埋める。黄龍と化した帝釈が舜を東の井戸へ導き隣の家の老婆に助けられる。
- ④ 老婆の勧めで母の墓に参ると、亡母に「歴山に行って耕作すれば富貴になる。」と言われる。歴山に行くと、天が感応し猪の群れや鳥が耕作を助け豊作となる。旅の商人から、父は盲目に、継母は愚者に、弟は気がふれたと聞く。
- ⑤ 十年後、米を売りに故郷の市場に行き、薪売りの継母に遭い米を施す。父と再会を果たした舜が舌で父の目をなめると、目が見えるようになる。継母は聡明に、弟も話ができるようになる。
- ⑥ 継母を殺そうとする父を舜は止める。堯帝が舜の孝を知り、娥皇と女英という二人の娘を舜に嫁がせ帝位を譲る。
- ⑦ 以下の二詩と天福十五年に書き終えたとの奥書きが見つく。

瞽叟填井自目盲、舜子従来歴山耕。 将米冀都逢父母、以舌舐眼再還明。
孝順父母感於天、舜子濤井得銀錢。 父母抛石壓舜子、感得穿井東家連。

「舜子変」と『史記』等との比較については前稿²⁾で記したが、『史記』では、堯が二妃を嫁すのが舜の受難の前であること、①の桃の樹の受難や④の歴山以降の話が無いこと、父の瞽叟は初めから盲目で、舜殺害を企てる首謀者であること、舜は自力で受難から逃れること、また舜の徳行による数々の功績が記されていること、仏教色が無いこと等が「舜子変」との違いとして挙げられる。以上を踏まえた上で、現存する民間文芸と「舜子変」との関係を次に考察する。

2. 「舜子変」と民間文芸について

『史記』等の記述とは異なり独特の内容を有する「舜子変」に関して、金文京氏は「敦煌本〈舜子至孝變文〉と廣西壯族師公戲〈舜兒〉」(『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』26 1994年)の中で、廣西壯族師公戲「舜兒」に「舜子変」のみに見られる桃の樹の話が含まれていることを発見された。また、陳永超氏

は「舜子変型故事在中日両地の流伝変異」(『民俗典籍文学研究』北京師範大学2016年)の中で、「広西桂平地区、即師公戲印本『唱舜兒』、採茶戲抄本『舜兒記』以及『広西桂平県民間故事集』中の『乞兒皇帝』、…1、『舜兒』(師公調 広西賓陽)2、『後娘和舜兒』(広西横県)3、『舜兒』(広西上林県 壯族、漢族)4、『舜』(広西龍州県)5、『舜的伝説』(広西崇左県)6、『舜哥的伝説』(福建大田県)7、『大舜耕田・坐天歌』(歌仔冊 福建廈門)」と、広西、福建において、「舜」説話を題材とする10の口伝文芸を確認したとされている。

『唱舜兒』、『舜兒記』、『乞兒皇帝』については、陳氏の著書³⁾に詳述され、7以外の資料は非公開資料であるため、本稿では「大舜耕田・坐天歌」について、唱本により「舜子変」との比較を行った。

〔1〕「舜子変」と「大舜耕田歌」「大舜坐天歌」の内容の比較

閩南の説唱「大舜耕田・坐天歌」の概要については後の表に示すが、以下に「舜子変」のあらすじに沿って比較を行う。「舜子変」の内容の①~③に該当する部分が「大舜耕田歌」、④以降が「大舜坐天歌」に該当する部分である。

① 桃の樹の場面(「舜子変」はS.4654及びP.2721vによる)

「大舜耕田歌」は「聽唱大舜一歌詩 古今第一有孝義 杭州杭義縣人氏 古井村中姚家兒…」と始まる。「舜子変」(S.4654)は、「姚(堯)王里(理)化之時、日洛(落)千般祥瑞。」と始まり、この「姚」について先行研究⁴⁾では堯ととっているが、P.2721vに於ける後の商人の「有一家姚姓…」という言葉によれば、舜の姓も「大舜耕田歌」と同じ姚である。また『史記』五帝本紀索隠でも皇甫謐が「舜母名握登生舜於姚墟、因姓姚氏也。」と言い、『宋書』符瑞上でも「母曰握登、見大虹意感而生舜於姚墟。」と記載している。

また「大舜耕田歌」では、一年後に妹の「華首」が生まれており、これは『漢書古今人表』に「馯手、舜妹。師古曰馯音口果反。流俗書本作繫字者誤。』、『説文』に「馯、舜女弟、名馯首。」と記載のある「馯手」「馯首」が音として伝わったと考えられる。「舜子変」では妹の名について特に記載はない。

その後実母が病気になり、「一對男女未成器 不通ト娶后妻伊 人説前人親

生子 后娘苦毒前人兒…」と父に子供を託す場面は、「舜子変」(S.4654)の「立(妾)有姑(孤)男姑(孤)女、流(留)在兒婿手頂、願夫莫令邊(鞭)耻。」と同様に、舜と妹の二人を託している。この舜の妹は、『史記』や『孟子』には登場しない。そして「大舜耕田歌」では、「若娶后娘怨男女 責罰双目不見天」と続き、「もし後妻を娶り子どもたちをいじめると目が見えなくなりますよ。」と、後に父親の目が見えなくなる伏線が敷かれている。

「大舜耕田歌」の第一の舜の受難は蓮根、第二の受難は荔枝であり、これはどの文献にも見られないものである。しかし、継母が荔枝の樹に舜を登らせ、樹の下に「箭」をまいて殺そうとするものの、却って自分が傷を負うという展開は、「舜子変」の桃の樹の受難とよく似た作りになっている。

また「大舜耕田歌」の第三の受難の砒素による毒殺の計画は、太白が仙丹に変えて売ったため酒肉に盛られても助かる話である。これは『古列女傳』で「倉」[井戸]の受難の後、「酒を大量に飲まされ殺されそうになるが、二妃の薬のおかげで全く酔わずにすんだ。」という第三の受難に通じるようにも思われる。

その後父の六舎が帰宅し、床に臥す後妻の讒言を信じ、「六舎聽見怒冲天 一時力舜打半死 苦麻提來就吊起 打罵猪狗一般年…」と、父が怒って舜を吊るして折檻する場面は、「舜子変」(P.2721v)の「瞽叟忽聞此語、聞嘖且不可嘖、…像(象)兒取得荊杖到來、數中揀一條龜物、約重三兩便下是、把舜子頭髮、懸在中庭樹地、從頂決到脚脰、鮮血遍流灑地。」と、瞽叟が象に荊杖を持って来させ舜の髪を庭の樹に吊るし、血が滴るまで棒で叩いて折檻する場面に共通する。尚、この時「大舜耕田歌」では「果然陰魂有靈聖 真容出現罵六舎 我子有孝爾無想 今日怨子愛后娘 爾那打死我大舜 即時力兒見閻君」と、亡くなった前妻の霊が出てきて遺言に反した夫に恨み言を言う。

父に折檻された舜は、「太白神仙得知枝 援救大舜真孝兒…偷入花園放我兒…爾哥全無一下痛」と、太白神仙によって花園に救い出され、全く痛みを感じずにすむ。「舜子変」(P.2721v)では「舜子孝順之男、上界帝釋知委。化一老人、便往下界來至。方便與舜、猶如不打相似。」と、救済者が太白神仙ではなく帝釈天と異なるものの、打たれていないかのようなだという内容は酷似している。

② 倉の修理の場面（以降⑦まで「舜子変」はP.2721vによる）

「大舜耕田歌」では、第四の受難として、継母が舜に粟倉の修理をさせ、象に四方から火をつけさせる。しかし太白神仙が舜を花園へ救出する。これに対して「舜子変」では、象が第一の火を、瞽叟が第二、象が第三の火をつけ、二つの笠を持って飛び降りた舜を地の神が救い、少しも傷を負うことが無かったとしており、加害者と救済者はやや異なるが話の内容はよく似ている。

③ 井戸浚いの場面

井戸浚いについて、『史記』では「穿井」、『古列女傳』では「浚井」、「舜子変」と「大舜耕田歌」では「淘井」である。「大舜耕田歌」では、この場面でも継母が計画し、舜を殺そうと井戸浚いをさせるが、太白が金銀を与え、更に7つの井戸に通じる大路と化して舜を救う。「舜子変」では、帝釈が舜に銭を与え、「帝釈變作一黄龍、引舜通穴往東家井出。」と、黄龍に化して舜を救う。

銭が無くなり継母と象が井戸に石を次々に落とすと、「當時立誓有説起 報應失明不見天 六舎即時返去 両眼青明看不見」と、前妻との約束を破ったために、伏線の通りに父の目が見えなくなる。初めから盲目であったとする『史記』とは異なり、舜を井戸に生き埋めにしたために父が失明する点は「大舜耕田歌」も「舜子変」と同じである。しかし、「舜子変」について、金岡照光氏はこれを仏教的な因果応報ととらえており⁵⁾、約束を違えると言う「大舜耕田歌」の人倫に反する原因とは異なっている。

妹の華首はその後忠義に厚い張舎大人に救われて養われる。この話は「大舜耕田歌」にしか見られない。一方井戸の底で泣いていた大舜は、水汲みに来た「大姨」に救われ、歴山に行って耕作することを勧められる。その後亡母の墓参に行き、そこで老人に化した「太白神仙」にも歴山に行くよう告げられる。「舜子変」では墓参を勧めるのは東の家の老母であり、歴山に行くように告げるのは亡母である。「大舜耕田歌」では、「太白神仙」が常に舜を救う役割を担う点で異なるが、母の墓参という他には見られない事柄が「大舜耕田歌」と「舜子変」に共通して見られるのである。（以上「大舜耕田歌」、以降「大舜坐天歌」）

④ 歴山での耕作の場面

歴山で舜の耕作を助ける「舜子変」の「群猪、百鳥」は、「大舜坐天歌」では、「獅、象、鳥、鵠、群鳥、猴、猫、鼠」と、多種の動物に変わっているものの、動物が舜を助けるという「舜子変」独自の要素は残されている。

⑤ 市場での再会の場面

「大舜坐天歌」では、三年たったある日、「太白神仙」は老人と化して舜の前に現れ、舜の故郷の杭州では飢饉が続いていること、また大舜を殺そうとしたため、父が盲目に、母が病気になることを伝える。「舜子変」で旅の商人が果たす役割を「大舜坐天歌」では「太白神仙」が担っている。その後、山神が龍王に歴山から杭州に海水を通すよう命じ、舜は米を船に積んで十日足らずで到着する。船での移動は「舜子変」には見られない話である。

杭州に着いて舜が米を売っていると、義弟の象が米を買いに来る。舜は錢を取らずに米を渡し、その話を聞いた継母が翌日来店し、最後に父が象に連れられてやって来る。「舜子変」では、継母が何度か米を買いに来た後父を連れて来るのに対し、「象→継母→父」という物語の三回化を考えた構造となっているようである。父と再会した舜は、「即時跪落投告天 焼香点燭真光彩 口舌舌爹两眼開」と天に祈り父の目を舌で舐めると両眼が開く。「舜子変」では、ここに天の介在は認められないが、「舜子拭其父涙、與（以）舌舐之、兩目即明。」と、あらずじは共通している。

その後張舎に養われていた妹の華首は呉家に嫁ぐ。「大舜耕田・坐天歌」において、妹の華首はもう一人の迫害された存在として描かれ、立派な家に嫁ぐことで幸せを約束される。

⑥ 堯帝が二妃を嫁し、位を譲る場面

舜が帝となった後、継母と象は京城に舜を尋ね、義弟の象に位を譲るよう舜に迫ると、そのことを知った玉皇が五雷に命じて継母と象を打ち殺す。「大舜耕田歌」では、舜を救うのが一貫して「太白神仙」（話を振り返る場面では「太白金星」）であるが、ここでは「玉皇」（道教の最高神）が現れ天罰を下す。

また「大舜坐天歌」には「舜子変」や『史記』に見られる堯の二妃は登場せ

ず、湯州の十八歳の西施のような女性を娶り皇后にしたとする。そして「大舜登殿民安定 五穀豊登見太平…舜君坐天數十年 即諒禹王去坐天…」と舜の時代は太平の世が続き、位を禹に譲ったとする。

⑦ 「大舜坐天歌」には、「舜子変」の詩と奥書きに該当する部分は無く、この歌を結ぶに当たり舜に学び孝行を尽くせと諭している。最後に「開天至今廿四世紀 伏羲至明崇禎止 共計四五六六年…」とあることから「大舜坐天歌」は明の崇禎（1628年-1644年）時代に唱われていたものであることが明らかである。

以上のことから、「大舜耕田・坐天歌」は、『史記』や『漢書』、『古列女傳』等正史系の影響も見られるが、内容は「舜子変」に非常に近く、中でも「舜子変」の「桃の樹」に近い「荔枝の樹」の話や、継母の讒言により怒った父が舜を折檻する話、そして亡母の墓への墓参や歴山での動物の援助の話等、「舜子変」にしか見られない話を有していることが大きな特徴である。

一方「大舜耕田歌・坐天歌」が「舜子変」と大きく異なる点としては、母の初七日の法要や妹を「観音」のようだと表す等、仏教的な事柄が見受けられるものの、舜を救うのは「帝釈天」ではなく、一貫して道教や民間信仰の神である「太白神仙」、「太白金星」、「玉皇」であり、更に父が盲目になるのは因果ではなく、前妻との約束を違えたためである。「太白」は「帝釈」から音が変化した結果とも考えられるが、全体に流れる仏教的な要素は少なく、「舜子変」が負っていた仏教布教の役割は終わり、道教や民間信仰の要素が加わって、より人々の生活に近いものとなった様子が窺われる。

「舜子変」に比べると、受難が五つに増え、継母いじめの様相が強く具体的に表され、迫害された舜と妹には幸福な未来を、継母と象には天罰が下るという結末を用意し、聴衆の期待により応える構成となっている。内容に若干の違いは見られるものの両者は大筋で合致し、「舜子変」特に大半の内容を占めるP.2721v特有の要素を有していることから、「大舜耕田・坐天歌」は「舜子変」P.2721vの流れを主に継承し、それを発展させたものであると考えられる。

〔2〕「舜子変」と「大舜耕田歌」「大舜坐天歌」との表現の類似点について

「舜子変」は語り物であることから、『史記』など正史系統とは異なる表現が見られ、それは「大舜耕田・坐天歌」にも同様に見ることができる。

① 繰り返しの表現

「舜子変」と「大舜耕田・坐天歌」には、繰り返し出てくる表現が多くある。

その中で「桃の樹」の謀り事に失敗した後、「舜子変」(P.2721v)で「大杖打又不死。忽若堯王勅知、兼我也遭帶累。解士(事)把我離書來、交(教)[我]離你眼去。」と、「舜を殺さないのであれば離縁しておくれ。」と後妻が父に迫る場面があるが、「大舜耕田歌」にも「你說大舜有打死 因何今日尚在生 你今愛子不打死 不如老身着來厘 爾寫離書交了我 甘愿再嫁別鄉里」と同様の表現があり、これはこの後共に表現を少し変えながら繰り返される。

また「舜子変」(S.4654、P.2721v)では継母の舜に対する「五毒嗔心便起」と言う語が舜の受難の前に繰り返し現れる。これは「大舜耕田歌」の「后娘就用毒心意」、「毒心用計害舜兒」に通じるものと考えられる。更に「大舜耕田歌」に頻出する「太白神仙得知機(枝、机)」は、P.2721vの「上界帝釋知委」と、救済する主体が「太白」と「帝釈」に異なるものの同様の表現と思われる。

このように「舜子変」に繰り返し現れる特徴的な言葉と同様の表現を、「大舜耕田・坐天歌」に見ることができるのである。その一方「舜子変」(P.2721v)で舜の受難の後に必ず付されていた「歸來書堂院裏、先念論語孝經、後讀毛詩禮記。」という時代的に齟齬がある表現は、「大舜耕田歌」には見られない。舜が後世の『論語』、『孝經』、『毛詩』、『禮記』を読むと言う、誤った、或いは当時大衆の啓蒙のために敢えて入れられた記述が削られた結果であろう。

「大舜耕田・坐天歌」が内容だけではなく、繰り返しの言葉等、「舜子変」と共通した表現を持つことも伝承を明示する証と考えられる。

② 構成と押韻

「舜子変」の文体については荒見泰史氏の論文⁶⁾に詳しいが、ほぼ六字一句で、途中四字句等もはさみ、韻を踏んだ構成となっている。全文の押韻については、拙稿『敦煌説話文献訳注稿』「舜子至孝変文」(2017年3月)で示したが、冒頭部「姚

王里（理）化之時、日洛（落）千般祥瑞。舜有親阿嬪在堂、樂登夫人便是。樂登夫人染疾、在床三年不豈（起）の二重傍線部は、時：上平声7「之」、瑞：去声5「寘」、是：上声4「紙」、豈：上声7「尾」、（起：上声6「止」と、周大璞氏の分類⁷⁾では同じ支微部に属している韻であり、最後の詩を含む段と奥書きを除き、S.4654もP.2721vもこの韻ではほぼ統一されていると考えられる。

最後の二首の詩については、以下のように押韻している。

盲：下平声12「庚」、耕：下平声13「耕」、明：下平声12「庚」、

天：下平声1「先」、錢：下平声2「仙」、連：下平声2「仙」

これに対し「大舜耕田・坐天歌」は、七字一句で構成され、冒頭の「聽唱大舜一歌詩 古今第一有孝義 杭州杭義縣人氏 古井村中姚家兒 伊父六舍親名字 伊母二娘姓曾氏 夫妻樂善兼好施 …」の傍線部に見られるように、詩：上平声7「之」、義：去声5「寘」、氏：上声4「紙」、兒：上平声5「支」、字：去声7「志」、氏：上平声5「支」、施：上平声5「支」と、「舜子變」と同じく周大璞氏の分類で支微部に属する韻を置いている。この後も基本的にこの韻を踏んでいくが、時折、邊：下平声1「先」、天：下平声1「先」、錢：下平声2「仙」、年：下平声1「先」等、周大璞氏の分類の寒先部の韻を句末に置いている。「大舜坐天歌」では句末に支微部の韻を置く割合がかなり減り、寒先部以外にも「聞」「文」「人」「紛」「群」など真文部の韻も見られるが、これは周大璞氏によると寒先部と通韻するものと考えられる。尚、この寒先部の韻は、「舜子變」の最後の詩と同じ韻である。

このように「舜子變」と閩南の説唱「大舜耕田・坐天歌」を比較すると、韻については不確定な部分もあるが、内容、表現、押韻において、共通の要素を多く有しており、「大舜耕田・坐天歌」には、「舜子變」、特にP.2721v系統が色濃く継承されていると考えられる。

三

⑩

3. 広西桂平地区に残る師公戲印本「唱舜兒」と採茶戲抄本「舜兒記」及び故事「乞兒皇帝」について

「唱舜兒」、「舜兒記」及び「乞兒皇帝」について⁸⁾は、陳永超氏も『堯舜伝

説研究』ですでに言及されているが、「舜子変」及び「大舜耕田歌」「大舜坐天歌」との比較を以下の表にまとめる。(下線部はS.4654における記載)

	舜子変	大舜耕田・坐天歌	唱舜兒	舜兒記	乞兒皇帝
構成	六字一句を基本とする韻文23行 (S.4654) +113行 (P.2721v)	七字一句 724句 (大舜耕田歌) +723句 (大舜坐天歌)	七字一句 360句	七字一句 929句	七字一句の段落も含む散文
家族構成	父— <u>苦瘦</u> (嗽)、 <u>姚瞽叟</u> 母— <u>樂登夫人</u> 妹— <u>姑</u> (孤) 女、 <u>後母</u> —女 繼母—後妻 義弟—象	父—姚六舍 母—曾氏 妹—華首 繼母—后娘 繼母の連れ子の弟—象	父—姚 母—李氏 妹—達倫 繼母—楊七嫂 繼母の連れ子の弟—特丈	父—杏公 母—李氏 妹—舜妹 (二歳下) 繼母—楊氏 繼母の連れ子の弟—象	父—孟公 母—媽媽 妹—舜妹 繼母—楊婆 繼母の連れ子の弟—象 (一歳下)

それぞれの話の内容については、後の表に示すが、「舜子変」と比較すると、細かい異同はあるが、大筋で内容は一致している。「唱舜兒」、「舜兒記」、「乞兒皇帝」はすべて広西桂平地区のものであるためか、繼母が楊氏であること、舜を救うのが上帝玉皇であること、また父が盲目になったのは舜を思って泣き過ぎたため (「乞兒皇帝」に至っては、父は繼母が舜たちをいじめることに悩んでいたとまで記している) 等、「舜子変」や「大舜耕田・坐天歌」には無い共通点が見られる。父の舜に対する愛情がより深く感じられ、繼母が「殺鶏比眼象兒吃、吃了骨頭分舜兒」等と、具体的に象を厚遇し舜を冷遇する様を記し、皆「繼子いじめ」の様相を強く描き出している。

また媒酌人の世話で後妻をもらうこと、歴山から船に米を積んで街へ行くこと、また最後に繼母が雷に打たれて亡くなること等は、「唱舜兒」、「舜兒記」、「乞兒皇帝」と「大舜耕田・坐天歌」に共通するもので、同じ話から伝承されたことを思わせ、語られた時代の習俗や場所の影響を考えさせられる。

以前拙稿²⁾で指摘した、正史系には見られず、「舜子変」等の孝子譚系に見られる、舜が救われる「東井」が、「舜兒記」と「乞兒皇帝」にも見られることは、これらが孝子譚系の話を受け継いでいる一つの証ではないかと考える。

「舜児記」の冒頭には二十四孝の刻子や孟宗を置き、「唱舜児」では董永を引き合いに出している。この「唱舜児」は葬礼の際に演じられたということであるから、祖先に「孝」を尽くすと共に、民衆に「孝」を説くために上演されていたのであろう。思想的には、いずれも「舜子変」が持つ仏教的要素は感じられず、舜を救うのも「帝釈天」ではなく、「太白神仙」、「上帝玉皇」、「玉帝」、「上界青天」等である。また、「舜子変」で井戸の場面で現れる「帝釈天」が化した「黄龍」は、広西の演劇、故事では「玉帝」及び「上帝玉皇」が遣わした「龍王」、「黄龍」として登場する。時代と共に仏教布教の目的が薄れると、「帝釈」は「太白」や「上帝」に変わっていったが、土着の神はそのまま残ったのではないかと推測される。

表現の面では、2(2)で前述した「舜子変」で「五毒嗔心便起」と表わされる継母の悪心は、広西の演劇、故事でも「処処表現心不好」、「后婆心里如毒蛇」、「楊婆心肝似墨黒」と同様の表現で表されている。また、「舜子変」に見られる俗講の特徴である繰り返しの表現も各々有している。

押韻に関して、「唱舜児」は、考：上声32「皓」、炮：去声36「效」、道：上声32「皓」、好：上声32「皓」…と、「舜子変」の押韻とは異なる韻を用い、「乞児皇帝」では一部に「舜子変」と同じ押韻があるのみであるが、「舜児記」は、時：上平声7「之」、詞：上平声7「之」、医：上平声7「之」、知：上平声5「支」、辞：上平声7「之」…と「舜子変」と同じ韻を踏んでいる。また「舜子変」は六句を基本に最後の詩は七句で構成されるが、散文体の「乞児皇帝」（一部に七句の構成部分も含む）以外はすべて七句となっている。

金文京氏は前掲の論文で、「『前漢劉家太子変』の劉秀の故事が明代の『全漢志伝』などの講史小説にみえる例が挙げられるが、この話も広西や雲南の儺戲唱本にやはり現れているのである。」と述べておられる。また伊藤美重子氏の論文⁹⁾によると、「漢将王陵変」について「王重民（『敦煌本〈王陵変文〉』国立北平図書館刊10巻6号 1936年）は…、明・清代の『西漢演義』に「知漢興陵母伏剣」の一回があり、変文と大筋で一致していることを指摘する。」とあり、「舜子変」も同様に上記の福建・広西の民間文芸へ伝承されてきたと考えられる。

「舜子変と説唱の内容の比較」

	舜子変	大舜耕田・坐天歌	唱舜兒	舜兒記	乞兒皇帝
①	(S.4654) 母(樂登夫人)が亡くなり3年の喪に服す。後妻を娶ると間もなく父の苦嗽(響聲)は遼陽に商売に行く。父が帰宅することを知らず、継母は舜を桃の木に登らせ、簪で自分の脚を刺す。 / (P.271v) 継母の讒言により父に折檻された舜を帝釈が救う。	「大舜耕田歌」 六舎の妻は夢に大虹を見て舜を産む。翌年妹の華首が生まれる。母は病気で亡くなり、24歳の後妻を娶り弟の象が生まれる。父が出かけると、舜は継母により、蓮根、荔枝、亂柔の受難では継母が厨の下に「箭」を撒き、自身が負傷する。帰ってきた父は継母の讒言を信じ、舜を折檻する。受難に遭った舜を常に太白金仙が救う。	姚は李氏を娶るが長年子供に恵まれず、仏を拜むと舜を身籠る。舜が7歳の時母が亡くなり3年の喪に服す。後妻の楊七嫂は45歳、連れ子の特丈を連れて来る。父が仕事で河南に行くこと、継母が舜を追害する。7月に象を取らせようと舜を厨に登らせ、下に「竹尖」を置いてがを負ってしまふ。舜が薬を買いに行き治る。	冒頭に24孝の劔子や孟宗の話置く。母の李嫂が亡くなり3年の喪に服す。七嫂が父の杏公に楊氏を紹介し、娶ると連れ子の象を連れて来る。兄弟は仲良く一緒に詩、書を読んだりしたが、2・3年たつと楊氏は財産を象のものにしようとう父を京州に商売に出す。継母置いたが、自分で両脚の地面に「杜楡」を置いて殺そうとするが靈神により自分で負傷する。舜が手当てのために上着を脱がせようとする棒で殴る。舜が医者を呼び傷が治ると更に象と二人で棒で殴り殺そうとする。妹が介抱し、上帝玉皇が龍神を差し向け医薬を施し治る。	舜が7歳の時に母が亡くなる。父は継母の楊婆が舜と妹を虐待することに悩んでいたが、楊婆に京州に仕事に行かされる。楊婆は舜を桃の木に登らせ木の根の周りに「箭」をまく自分が刺さり、怒って舜に炭火でやけどをさせる。上帝玉皇が黄龍に業を授けて治す。
②	舜は倉の修繕をさせられ下から3人に火をつけられる。舜は笠を持って飛び降り地神に助けられる。	舜は継母に粟倉の修理をさせられ、継母に命じられた象が火をつける。太白金仙が舜を花園へ救い出す。	継母が舜を屋根に上らせ雨漏りを直させ、東、西、四方八方から火をつける。舜の泣き声を上帝が聴いて雷雨を降らす。舜が継母を問いつめると、言いがかりだと舜を棒で叩き、舜は山へ逃げる。妹もやって来て泣いていると上帝が神仙を下し、舜を治す。	舜を倉に上らせ象が梯子を取ると、継母が倉に火をつける。上帝玉皇が大雨を降らせる。	楊婆は舜に倉の水漏れを修理させ、象に命じて梯子を外させ、倉に火をつける。上界青天が大雨を降らせ火を消す。
③	舜は井戸浚いをさせられるが、帝釈が銀錢500文を与え、引き上げさせる。父に石で埋められるが黄龍になった帝釈が舜を東の井戸へ導き隣のお婆に助けられる。	継母に井戸浚いをさせられた舜に太白が金銀を与え、更に7つの井戸に通じる大路に化けて舜を救い、大姨に井戸の底から助けられる。父は趣いを受けて盲目となり妹は張倉大人に養われる。	父は継母が改心したと信じ、また2・3年仕事に出かける。継母は舜に井戸掘りをさせ、下には宝もあると聞くと言う。舜が井戸を掘ると継母は象に土や石を運ばせて埋める。舜の泣き声は玉帝を感動させ、龍王を遣わして救わせる。舜が井戸端で泣いていると金母がわけを聞いて舅の家を紹介する。	舜は古井戸浚いをさせられると、上帝玉皇が掘った泥を銅銭に変える。継母と象が石を落とす。井戸の中の龍神が天に奉ずると上帝玉皇が黄龍を差し向け舜の井戸から西の井戸へ舜を引っ張り、水汲みに来た叔婆が孫を救い出し、家から離れるように言い銭等を渡す。帰宅した父は悲しみの涙で目がつぶれる。	楊婆は舜に古井戸浚いをさせると、上帝玉皇が泥を銅銭に変える。楊婆が大石を井戸に落とす。上帝玉皇が龍神に命じて、東の井戸を西の家の井戸に繋ぎ大叔婆に助けられ、銭や米をもらって家を出る。数年留守にしていた父が戻り悲しみに暮れ盲目となる。
④	老婆の勧めで母の墓参に行き、母に歴山での耕作を勧められる。天百鳥が感応し猪が耕し、鳥が種を蒔いて舜を助ける。旅の商人から舜を埋めた因果で父が盲目に、継母は愚者に象は気がふれたと聞く。	「大舜坐天歌」 大姨に歴山へ行くことを勧められ、母の墓前を泣いていると、老人に化れた太白金仙に歴山での耕作を勧められる。獅子や象が田を耕し、鳥の群れが草を啄み、猿や猫、鼠が手伝う。	その後歴山へ逃げ晋公の所で3年半の世話をし、貯めたお金で歴山に家を作ることにする。山牛馬鹿が手伝い、五穀豊穡となる。	舜は李家の張者(長者?)の家で牛馬の世話をして暮らしたが、牛馬について龍山の歴山に行き広大な荒地を見つけ、張者に話すと、管ての自分の土地のこと。銭をもらって歴山に行くこと夢に靈神が現れる。上帝玉皇が龍神を遣わし山猪馬鹿、馬雀、猿が耕作を、魯班が建築を手伝う。	舜は神州の歴山の張家で、牛馬の世話をして暮らしていたが、歴山の荒地を見つけたと、張氏から銭を贈られ耕作をする。上帝天神が黄龍を差し向け、山猪馬鹿、白鶴が耕作を助ける。山羊野馬が建物作りを助ける。

<p>⑤</p> <p>十年後飢饉の故郷の市場に米を売りに行く。継母が米を買いに来たが銭はとらず、その後父と再会する。父の目を舐めると開目する。</p>	<p>三年後太白神仙が龍王に命じて海水を歴山王に杭州に通じさせ、舜は船で米を運んだ。義弟の象、継母が米を買いに来たが、ただで三升の米を渡す。その後父と再会し、天に折り父の目を舐めると開眼した。張氏に養われていた妹は呉家に嫁く。</p>	<p>天下は早魃だったため船に米を積んで街に行く。継母が米を買いに来た。話を聞いた父が舜の妹の達倫に連れて行ってもらい舜と再会する。父は舜がいなくなり泣いて目がつぶれたと言ひ、舜は手で父の眼をなでる。継母は孝子の董永の話を持ち出す。3年半孝を尽くすすようやく父の眼は見えるようになる。</p>	<p>天下の飢饉を知り、舜は船で平安圩に着くと、皆が米を買いに来た。夢を見ると、翌日継母が米を買いに来、米を渡す。父はこの話を聞くと、昨夜黄龍を夢に見たと言う。妹が父を市場に連れて行き再会する。舜が父の目を舐めると開眼する。叔婆に礼をし、父と妹を載せて出航しようとする。継母と象も来て乗せる。</p>	<p>歴山に来て2年目に洪水で飢饉が発生し、舜は船で平安圩に行き米を売る。米を買いに来ると、同情を買おうと泣く楊婆に米を分け与え、話を聞き父は舜妹に市場へ連れて行ってもらう。父と再会し舜が父の目を舐めると開眼する。大叔婆に礼をし、父と妹、更に楊婆と象も船に乗せ歴山に帰る。</p>
<p>⑧</p> <p>継母を殺そうとする父を舜は止める。至孝の舜の話聞いた堯帝は二人の娘を舜に嫁し位を譲る。息子の商均は不肖だったため禹に位を譲る。</p>	<p>堯は舜に位を譲り、舜の位を奪おうと謀った継母と象は、玉皇に命じられた五雷によって打ち殺される。舜は越州の娘を娶る。太平の世が続き、禹に位を譲る。</p>	<p>舜は王になったが、継母は弟の特丈を王にしようとして毒薬を買う。玉皇が電王に命じ継母を打ち殺させる。</p>	<p>堯がこの話を聞き舜が位につくと父と継母は国父母となり、妹は皇帝が電王に命じ継母を打ち殺させる。</p>	<p>舜が歴山を開墾し民を救ったことを聞いた堯帝は舜に位を譲ろうとする。それを知った楊婆は象を帝にすることを企み、舜の靴の中に「過山風」(毒蛇)を入れるが、その靴を履いた象が咬まれて死に、楊婆は雷に打たれて死んでしまう。舜が即位する。</p>
<p>⑨</p> <p>「天福十五年」の奥書を有す。</p>	<p>「開天至今廿四世紀伏羲至明崇禎止」と記載がある。</p>			

4. 「舜子変」の欠損部分について

最後に、「舜子変」が伝承されたと考えられるこれらの説唱から、逆に失われた「舜子変」の内容について考察する。「舜子変」は他の鈔本でも初めから終わりまで一貫した話としては発見されておらず、S.4654及びP.2721vを合わせて底本としてきた。S.4654は「舜子即忙下樹」で書き止めてあり後部が無く、P.2721vは前半部が破れ、継母が怪我をして床に臥している部分から読むことが可能である。「解散自家頭計(髻)、拔取金艾(釵)手裏。次(刺)破自家脚上、高聲喚言舜子、我子是孝順之男、豈不下樹与阿嬢看次(刺)。舜子忽聞次(此)言、将為是真無為(偽)。舜子即忙下樹。」と、桃の樹に登っていた舜が、簪で自身の脚を刺した継母の叫び声を聞いて下りるところでS.4654は書き終えており、P.2721vの初めの部分が欠損しているため、数行分の内容が不明である。

しかし、P.2721vでは瞽叟が帰宅した際に、継母が「前家男女不孝、見妾後園摘桃、樹下多里(埋)悪刺、刺我两脚成瘡、疼痛直連心髓。當時便擬見官、

我看夫妻之義。老夫若也不信、脚掌上見有膿水。見妾頭黑面白、異生猪狗之心。」(先妻の子は不孝者で、私が裏庭で桃を摘むと、樹の下にたくさんの悪い刺を埋めました。その刺に刺されて私の両脚は傷を負い、心の髓まで痛みます。すぐに役人に訴えようと思いましたが、夫婦の義に免じました。あなたがもし信じないなら、脚の裏の膿を見て下さい。私の黒髪と色白な面立ちを見て、畜生の心を起こしたのです。)と讒言する場面がある。つまりS.4654とP.2721vの空白部には上の波線を引いた部分に相当する事件があったと思われる。この空白部分について、「舜児記」には「楊婆出血聲聲哭 舜兒母哭泪凄悲 舜兒引母去為屋 別換后笊身上衣 后笊唱起高聲罵 拾棍又来打舜兒…」と言う記載がある。怪我をして血を流している継母(后笊)を舜は家に連れて帰り、血で汚れたためか、或いは傷の手当てのためか服を着替えさせようとし、そのために継母に罵られ棒で殴られる。これこそが、まさに二つの「舜子変」の空白を埋める記載ではなかろうか。孝行な舜の親切心を継母が悪くするというのは自然な流れとして納得できるものである。

他の文献に「桃の樹」の話が見られないことに関し、金文京氏は前掲の論文で、「桃の樹」の話が消えたのは、「[妾の頭黒く面白きを見て、猪狗の心を冀生す]と継母が述べているように、この話が舜とその継母の間の性的な関係を暗示しているからにほかならない。たとえそれが継母のでまかせであったにせよ、このような話柄は大聖人たる舜の話として、また童蒙に語り聞かせる孝子譚の内容として、きわめて不適切であることは言うまでもない。すなわちこの話は性的なタブーを犯したために消えて行ったのである。」と言及しておられる。「舜児記」にはその消えて行った話が残されているのではなかろうか。

ここでそれぞれの話の「桃の樹」の場面を比べてみると、S.4654は継母が簞で自分の脚を刺すのに対し、P.2721vは「悪刺」、「大舜耕田歌」は「箭」、「唱舜兒」は「竹尖刀」、「舜児記」は「壮槍」、「乞兒皇帝」は「箭」と、皆竹のような尖ったものを樹の下に蒔き、継母が誤って踏むという展開となっている。東洋文庫所蔵の広西壮族師公戲「舜兒」(1992年田仲一成氏撮影)のビデオでもやはり竹の釘のようなものを踏んで痛がる継母が演じられている。つまり本稿

で取り上げた唱本類は、簪で自分の脚を刺すS.4654ではなく、すべてP.2721v系統の「舜子変」と共通する内容となっている。

自分の利益を何よりも優先する継母が、舜を陥れるためとは言え、簪で自分の脚を刺すことまでするであろうか。また倉や井戸の受難とは違い、これでは舜を直接殺すことはできない。自分の脚を刺して、父を怒らせ舜を殺させようとする策は他の受難に比べて複雑すぎ、継母の考えとしては違和感を覚えるのである。樹の下に尖った竹を置くのであれば、単純に舜を殺すことも可能であろう。「簪」の話には無理があるように思うのである。継母が自分の足を簪で刺したとするS.4654の「舜子変」は金氏の所謂タブーの前までを第一場として書いた話だったと考えられる。東洋文庫所蔵のビデオ「舜児」もS.4654の書き止まりの部分までを演じており、ここまでが第一場であったことを物語っている。金氏によると、「明の崇禎年間刊行の周流編『開闢衍繹通俗志伝』第43回「大舜躬耕於歷山」の井戸の話に、継母が「頭上の金釵」を井戸に落とし舜に拾いに行かせる話があり、わずかながら共通点を見いだせる。」とされている。しかしその他には「簪」の話は見られないのである。

したがって、初めの部分が欠けたP.2721vが広西・福建に伝承されてきた「舜子変」の系統であり、その欠落部分には「桃の樹」と「悪刺」の話があったことは、P.2721vの継母の讒言から明らかである。そして「舜子変」に欠損しているS.4654とP.2721vの間の部分に当たる、父が激怒し舜を折檻する理由となる話が、「舜児記」に残されていると考えられるのである。「舜児記」は「舜子変」と押韻の韻字も近く、「桃の樹」の話や堯が娘を嫁す話があり、また「6.7歳になると詩書を学んだ」という、前述した「舜子変」の誤りと同種の記述や、父が商売に出かけた後は舜が悪行三昧だったと讒言する継母の酷似した表現などから、「舜子変」P.2721vを忠実に継承している箇所があると考えられる。

P.2721vは奥書に「天福15年歳當己酉」とあることにより、書写された年代は950年であろうと思われるが、S.4654については不明であり、金岡照光氏によれば¹⁰⁾、S.4654の紙背に「大周光順4年」(954年)の記年を含む文が見られるとのことである。どちらが先に書かれたものかは定かではないが、P.2721v

の最後の識語によると、この文章は「盈」という人物が命を受けて浅学ながらこの文章を書いたと記されており、来歴がより明確に分かるものである。

結論

「舜子変」と、閩南に伝わる「大舜耕田歌」、「大舜坐天歌」及び広西に伝わる「唱舜児」、「舜児記」、「乞児皇帝」とを比較すると、大筋の内容は非常に似ており、表現の面でも共通する要素があることから、これらの民間文芸は「舜子変」を継承したものであると考えられる。

その「舜子変」自体はS.4654とP.2721vという重複部のない異なった二鈔本を底本としているが、福建、広西に伝承されているものは内容及び表現から見て、P.2721vの系統であると考えられる。またS.4654とP.2721vの間で欠損している内容は、「舜児記」の「舜児引母去為屋 別換后斧身上衣」という記載により復元されるものと思われる。しかし、これを確実なものとするためには更なる調査が必要である。

語り物としての「舜子変」は、その後道教や民間信仰の影響を受け、また伝播した土地の習俗や時代に合った変更を加えられながら、現代まで説唱や演劇等の形で伝承されてきたと考えられる。

本稿は福建・広西に伝わる四種の唱本類について比較を試みたが、今後他の舜に関わる民間文芸を調べることにより、失われた「舜子変」の本来の姿をより明らかにすることができるのではないかと考える。

注

- 1) 猪から象への変化については、「舜子変について—舜説話の比較から見るその特徴と伝承—」(お茶の水女子大学 修士論文 2021.3)でも言及した通り、『論衡』書虚篇「舜葬於蒼梧、象為之耕、禹葬會稽、鳥為之田。」、及び『文選』卷五呉都賦「象耕鳥耘 注越絶書曰舜葬蒼梧象為之耕、禹葬會稽鳥為之耘。」に見られる陵墓を作る際の記載と混同されたと考えられる。更に『甫里集』(唐 陸龜蒙)の「象耕鳥耘辨」では、すでに「世謂舜之在下也、田於歷山象為之耕、

鳥為之耘、聖徳感召也如是・・」とあり、『全相二十四孝詩選』の詩と同様に象による舜の歴山での耕作が記載されている。

- 2) 『お茶の水女子大学中国文学会報』第39号「「舜子変」について—舜説話の比較を通して—」2020.4
- 3) 陳永超『堯舜伝説研究』南京師範大学出版社 2000
- 4) 姚については、項楚の『敦煌變文選注』、及び黃微・張涌泉『敦煌變文校注』ともに古韻が通用することにより「堯」ととる。
- 5) 金岡照光「舜子至孝變文の諸問題」『大倉山学院起要』第2輯 1956.11
- 6) 荒見泰史「舜子変文類写本の書き換え状況から見た五代講唱文学の展開」『アジア社会文化研究』11号 2010.3
- 7) 周大璞「『敦煌變文』用韻考」『武漢大学学报（哲学社会科学版）』1979
- 8) 「唱舜兒」、「舜兒記」、「乞兒皇帝」については、原本を見ることができないため、陳永超氏の『堯舜伝説研究』の資料を底本とする。陳氏によると「舜兒記」は広西桂平地区の桂南采茶戯の伝統劇で、莫守冰（1874-1954）の口唱に基づき1962年に記録した抄本を韋耀球氏が発見したものであり、「唱舜兒」は『董永・舜兒・毛洪・雷王勸民—上林壯族師公叙事歌』李守漢採集の広西民間文学資料37・壯族歌謡に掲載（1985年7月広西民間文学研究会編印）されているもの、「乞兒皇帝」は『広西桂平県民間故事集』中のもので1986年5月に劉経元により採話されたものである、とのことである。
- 9) 伊藤美重子研究代表『敦煌説話文献訳注稿』「漢将王陵変」2017.3
- 10) 金岡照光「敦煌の文学文献」『講座敦煌』9 大東出版社 1990